

平成二十六年十月一日発行 第二十四巻第十号 通巻第二八〇号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成26年10月号

岡井省二創刊



王道の草

高橋将夫

参道はどこも真つ直ぐ炎天下

母の膝父の背中や走馬灯

新樹光人は末期に見るといふ

殿といふより蜥蜴の尻尾なり



四 度 目 は 神 に 頼 む か 冷 し 酒
冷 酒 や 縮 ま つ て ゆ く 男 女 の 差
が が ん ぼ が 水 に 入 れ ば 水 馬
他 人 事 の や う に 音 聞 く 遠 花 火
夢 の 世 の 夢 に は あ ら ず 落 雷 は
二 心 あ れ ば 檣 円 に 夏 の 月
王 道 の 草 も 時 に は む し る べ し



槐安集

水野恒彦

芽花流し喪ごころ白く吹かれをり
空蟬や念力の爪ゆるがざる
一盞の冷酒に命透けてきし
羽抜鶏やがて虚ろに走り出す
流れゆく水に晩夏の翳りあり

加藤みき

何枚も桧葉に包まれ鮎届く
夕立も小雨もみんな天降る
青田風ややの泣きごゑしてゐたる
秋風や人の集まるところかな
夏蓬にあをあを蔓のからみたる



中島陽華

八朔や胡麻丹念に播つてある
大徳の檀那の間なり甘酒を
眼前に 弥勒笑うて牛蛙
流し目に石となりたる山女釣
枇杷高く熟れてチブサン古墳かな

竹内悦子

天竺につづく海辺や合歡の花
蝌蚪にあし森青蛙になる途中
われ傘寿慈姑の花のやうなもの
心経に無の字あまたや蟾蜍
白木槿お稲荷さんの金柄杓

雨村敏子

朝顔の蔓の天辺海^わの原
素裕の心わけても木の匂ひ
七月の汀にいつもの父のゐる
苦瓜の葉先のしづく五智如来
サングラスあなたのいろが見えませぬ

本多俊子

光陰を昨日のやうに新茶くむ
花南瓜空襲のなき空の青
少年の机に本と空蟬と
八十路きて女は女巴里祭
遠山の襷くつきりと晩夏かな

近藤喜子

さりげなき言葉のやうよ酔漿咲く
太陽の気をからめとり凌霄花
玉虫の夢幻となりし光かな
静けさの集つてゐる布袋草
腥き身を紅蓮の香にさらす

瀬川公馨

道の端に夏の真あり熱気球
パリ祭^{二〇一四}や鬼千匹を一絡げ
^{ブラジルワールドカップ}青芝にかみつき亀とモヒカンと
ゆめゆめの金唐草紙夏やかた
草臥しや李白も観瀑してゐたり

久保東海司

外出に晴雨を兼ねる日傘かな
流燈を送る歩みとなりぬたり
無粋とはかくも男のかき氷
縄飛びの描く半円虹を容れ
金剛の風を飼ふごとキヤンプ張る

柳川 晋

井戸の底見ぬやうにして瓜冷やす
蜜豆を食ぶや大空軽くなり
無頼派や桃色紙を形代に
虹の根を捌いて売つてゐる女
肌脱ぎの作法は伝へられぬまま

岩下芳子

萍を分けて神話の国覗く
梅雨の果て日本列島しだらでん
百物語一話残して明けにけり
未央柳咲いて老舗の代替り
神木の 大楠 動く 祭 笛

近藤紀子

雲の峰に八百万神の集ひたる
湖の辺に紅映梅べにさしの熟れてをり
箱庭にキティちゃんらの遊びをる
祇園囃子がBGMの老舗かな
青柚を散らしてゐたる夕餉なり

岩月優美子

向日葵の群立ち何を謳はんや
螢火の奥へ奥へと彼の世かな
巴里祭ピアフの賛歌もの悲し
炎天に怯みてゐたる物の影
六界を潤す山の滴れり

竹中一花

木の札のろの三なりし夏座敷
紫蘇漬ける匂ひを妣の香と思ふ
玉獅子も王も海波も銚の辻
手鞆に夏を詰め来て駅ミスト
橋桁に水禍のあとや魚走る



槐市集

中島昌子

ソーダ水の泡見てをる赤ん坊
母がりは山深き村喜雨来る
雲の峰を目差してゆくやロープウェイ
白緋着て京の町行く異邦人
七夕や億光年先に星生るる

中田禎子

パリー祭大和言葉の美しき
噴水に入る幼ナと土鳩かな
集合や以心伝心雨蛙
半夏生屋根の鳥のよく鳴く日
夏帽を被りしままの出会いかな

中谷富子

くちなしの香を送り出す風のあり
城めぐりのいつしか恋に道をしへ
大津絵の鬼の念佛雷近し
ダム放水警報に飛ぶ岩つばめ
梅雨の月女世帯に男傘

中堀倫子

青草の下に流るる水あかり
汗拭ひ目薬最中一番客
田面を角度をひくく夏のつばめ
夏瘦もせず腹のあつさがますばかり
思ひもよらず足をすべらす夏鴉



中道愛子

はまなすやとんがり屋根の駅舎あり
じやぶじやぶと顔を洗うて山清水
とりあへず冷索麵で済ませけり
鮎食べて昭和一桁たくましき
会釈して行き交ふ人や立葵

橋本順子

生きものの出入りしたる茂りかな
ソーダ水に森の息吹のありにける
子の脚のすらり伸びたる夏休み
こぼるるほど人乗せ鉾の動きける
母の好きな鬼灯に日の暮れにけり

前田美恵子

陶芸の森に迷うて遅日かな
負ける気はさらさらなしよ裸の子
顔中に氷菓の跡や稚や眠る
嫌なこと闇に打ち上げ花火かな
ターニングポイントを決め平泳

柳橋繁子

風通ふ葛城の道夏薊
藍よりも青き古刹の額の花
足洗ふ浪速に食せし半夏蛸
丹波越へ小雨にけふる合飲の花
七月の雨に砧の手水鉢

山田佳子

こんちきちん屏風絵具せし鉾の町
川床料理賀茂の河原の水面映ゆ
夏衣や往事の景の清かなり
古は向こう見ずなり芥子の花
日裏より青空望む青簾

吉田順子

人恋し笹百合の香の盛りなり
憂さ晴るる夏満月の閑けさに
森の木々白き花増え夏来る
あめつちの闇を一つに仏法僧
でで虫の歩みに虚飾なき自由

槐集

高橋将夫選

白蓮の香りほのかや握り飯 寝屋川 前田美恵子

四人して花街^{かがび}を歩くソーダ水
枇杷の種散らばつてをり猿道^{まもろ}

へば 胡瓜 嘗て 女 劍 戟 者

海の色掬ひ上げたる水母かな

百幹の竹の匂へる涼しさよ 枚方 熊川 暁子

蟻走る走らねば世の終るらし

花つけてすでに曲がつてゐる胡瓜

我につく何の化身ぞ梅雨の蝶

水芭蕉炎えたらどんな色になる

浮世絵の美人は同じ心太 大阪 江島 照美

ピンヒール素足の肌の締めりけり

胡瓜もぐとげの鋭さ知らぬまま

かざす手に西日の刺さる痛さかな

禅寺の粥の白さよ半夏生

土の香と白百合の香は死の匂ひ 大阪 有松 洋子

わが部屋に我の不在の暑さかな
祖母のつかふ団扇の風は祖父に向け

風筋に立ちてたましひ涼ませり

空蟬のたしかに鳴きし夜のあり

夏怒濤いのちの讃歌高らかに 岡崎 寺田すず江

右脳左脳使ひ古りたり天の川

蟻地獄のつついてをりぬ男の子

もの忘れしてももの思ふ巴里祭

大西日あしたのためにつふを生く

葛切の黒塗の椀無一物 摂津 中田 禎子

打水や影が吸はれてゆきにけり

夏柳女性の姿なかりける

深山の迷路に入りし山椒魚

こもごもの告知幽霊水母かな

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

白蓮の香りほのかや握り飯 前田美恵子
白蓮のほのかな香りの中で握り飯を食べている景。上品な弁当でなく握り飯であるところがいい。白蓮の香りと握り飯の海苔の香りがほのかにたたよう。白蓮が鮮やかに目に浮かぶ。

「枇杷の種散らばつてをり猿道」の句は今にも猿が現れそうなりアルな景。〈海の色掬ひ上げたまじら〉の句では、「水母が海の色を掬ひ上げた」という感性に惹かれる。

「四人して花街を歩くソーダ水」はなんでもない景だがソーダ水がよく利いている。へへぼ胡瓜嘗て女劍戟者」は、へぼ胡瓜と女劍戟者の取合せが面白い。

百幹の竹の匂へる涼しさよ 熊川 曉子
竹林に吹く風の爽やかさがよく伝わってくる。一百幹の竹」が一句に力強さを与えている。

「蟻走る走らねば世の終るらし」の句、「世が終る」はいかにも誇張された表現だが、蟻の本質を突いていて面白い。

「花つけてすでに曲がつてゐる胡瓜」の句、しぼんだ花がまだ取れていない小さな胡瓜だが、すでに曲がつているという。「三つ子の魂百まで」というから、このまま大きくなるのだろう。

浮世絵の美人は同じ心太 江島 照美
浮世絵の美人もよく見ればそれぞれ違うが、それをみな同じと言いつつ切った。確かに様式美とはそんなものだ。

「かざす手に西日の刺さる痛さかな」の句からは、西日の強さがよく伝わってくる。〈禅寺の粥の白さよ半夏生〉の句では、「禅寺、粥の白さ、半夏生」が見事に調和している。

土の香と白百合の香は死の匂ひ 有松 洋子
土の香ときつい百合の香はたしかに死の匂いかもされない、母なる大地と美しい百合の一面なのだ。

一転、〈祖母のつかふ団扇の風は祖父に向け〉はなんとも慈愛にみちた一句。へわが部屋に我の不在の暑さかな〉は不在の部屋の暑さを捉えて、ユニーク。

夏怒濤いのちの讃歌高らかに 寺田すず江
作者の気持の若さについては句集『明日葉』の序文で触れたが、その若さ、今なお健在といったところ。

打水や影が吸はれてゆきにけり 中田 禎子
乾いた石畳が打水で濡れ、次第に乾いてゆく。そこに影が現れ、消えてゆく。まるで影が吸いこまれてゆくような景を見ているのだ。

夏燕 残照 かるく裏返す 犬塚 芳子
残照は日没後もなお空に残る夕日の光。その中で翻る燕はまるで残照をひっくり返しているようだという。

貧眼痴背負うてゐたる梅雨菌 とんじんち谷岡 尚美
含瞋痴とは貧欲と瞋恚（怒り）と愚痴の三種の根本的な煩惱。言われてみれば、梅雨菌はその煩惱を背負っているような気がする。（以下略）